





18
1833
11

繪本古岡記第十一之卷

目錄

明智光秀攻池田城

明智光秀説池田勝政

松永彈正属足利家

義昭公將軍宣下信長任官

函後等龍衣本國寺

本國寺合戦

凶徒等敗走杭川

信長再上洛

のぶなをいふてさうのとてふんをやさす
爲^三信長怒^二燒^二燬^一町人^一

繪本古圖記卷之十一

明智光秀攻池田城

沸^{ふつ}き^こみ^こ懲^こる^こり^この^こち^こ冷^さ齋^{さい}を^を吹^ふら^らは^は傷^{やぶ}る^こる^こ曲^{まが}本^{ほん}み^み
 驚^{おどろ}く^こと^こや^こ晋^{しん}の^こ耐^{たい}玄^{げん}賊^{ぞく}を^を討^うて^こ乞^こを^を退^おふ^こ賊^{ぞく}兵^{へい}も^も八^{はち}公^{こう}山^{さん}
 の^の樹^{じゅ}本^{ほん}同^{どう}は^は執^{しつ}く^こを^を耐^{たい}玄^{げん}が^が軍^{ぐん}兵^{へい}と^と思^{おも}て^こ走^{そう}り^こ平^{へい}家^けの^の
 大^{たい}軍^{ぐん}水^{すい}多^たの^のお^お青^{せい}は^は驚^{おどろ}き^こ都^とと^と迎^{むか}え^こり^こし^しも^も皆^{みな}日^{にち}日^{にち}の^の渡^{わた}り^こ也^{なり}
 三^{さん}好^{こう}の^の二^に黨^{たう}按^{あん}河^かと^と國^{こく}の^の城^{じやう}は^は捕^と籠^{ろう}款^{くわん}耐^{たい}の^のを^を取^とり^こて^こ
 信^{しん}長^{ちやう}の^の大^{たい}軍^{ぐん}は^は遠^{えん}ら^らに^に渡^{わた}り^こ諸^{しよ}方^{ほう}の^の城^{じやう}へ^へ一^{いつ}軍^{ぐん}攻^{こう}め^こり^こ
 若^わ向^{かう}り^こし^して^こ兵^{へい}の^の風^{ふう}を^をみ^みる^こに^に三^{さん}好^{こう}の^のお^お士^しは^は安^{やす}き^こを^を
 お^おろ^ろし^して^こ落^{らく}ち^こ度^どの^のを^をみ^みる^こま^まの^のを^をみ^みる^こに^に尼^に侍^{しやう}は^は龍^{りゆう}城^{じやう}
 へ^へ荒^あ木^き橋^{はし}守^{しゅ}村^{むら}を^を修^{しゆ}丹^{たん}の^の修^{しゆ}丹^{たん}大^{たい}和^わ守^{しゅ}親^{しん}與^よと^と人^{ひと}も^もい^い



三好勢忍師



將軍家の御方より信長の御方より兵庫より
 明石の邊より兵船を救ふは中興西國の諸侯の軍
 應一三好清成のお上洛より流言せし武庫
 邊より兵船を放火し海陸ともに憂ふる勢ひを
 三好大に恐怖し布衣より龍宮細川掃部次三好
 へ將軍義隆と守護し阿波國へ送り諸方の城を
 を立てて俄に周泰致し海陸を敵の害め肉よと我
 又城を用ひていへば松より多かりに國の地を
 其中に池田の城を池田義隆後守勝政只一人足利家に
 龍城としてあり信長卿明智光秀も令じて池田が
 城を攻討しむ光秀長子福富築田堀川を引連其勢

都合三より余騎池田の城へ押寄圍ひ作つて攻め
 衆入りて池田義隆後守二百余人の軍兵を引く
 切て出馬を振ふと戦ひつれば光秀が軍勢柵
 鉄砲をひておとす人雨のおとに放ちければ池田も左
 方へ進み馬を立ておとす人小田の軍も堀川も
 池田義隆後守を討たる名は備人と槍矢接て戦ひ
 池田義隆後守二よりすのち力振る人交りて
 大勢を散し戦ひつれば勝政も練や勝りて堀川
 を腹の下へ更流し堀の中程を切て落し堀川も
 力を振んとする人をけりて堀のまへに鐵砲も
 おとす堀川も力よりいへば堀をたする人



明智秀満の
城を攻む



仍白よと倒るを勝政が即ち走りよりて首をえり
とて先秀が勢の中より明智弥平治は次郎他三宅奥田
安切先を揺る後守と討ち喚と叫んで切結を
中より池田丹波守二百余人勝政を討てて國を
討てて出軍は又入札と火水とをて我の形勢入遠
先秋の夜の稲妻の如くお合とる流の音は百々の雷動
多し喚き叫ぶ難波山川を動しと天は響き地は微と涼
まゝとも中くいん方こそありたり

明智先秀説池田勝政

明智先秀はるき國より戦ひを見居るふ敵は池田
後守天神のおとく勇を震ひ人なきを我の如く先秀

其勇威を心は感へ此者所討ちん戦ひ勝り難うべしと
自決炮を多く後守が胸板と揺るひ脱は切て放んに
かうし其勇おをせ下は討殺せん情なきは他はと揺る
を和し馬の平首を打振より暫しもたす人馬とも
るに應じて倒れり敵も味方も後守討ちりて見
くくればあはれは是より得て大なる國を作つてま
城兵は主討ちりてあはれは是より得て大なる國
る池田丹波守敵し下知し漸く軍士をまゝ幸は
て城中へ入るれと外郭を系たし本丸こそ龍を
これ先秀の士率に下知して本丸の正面は紫藪を
積るの松明を教多焼しつねに火はけ城郭も

焼捨んと其用ををさうろ城申よりをきてとど
 令い惜めろとる落城者さうろ城始て七百人へ
 御腹心宗徒の者百余人めをかりにさうろ城に
 守より思ふさうろ城龍城叶に切て出て討死せんと
 名沙の面をうしむ時酒宴を催さうろ城は太の城
 安の太明智十と清光秀馬を系居大音とて城に
 田後守より一言中へさうろ城にさうろ城は
 よろをさうろ城に後守よりさうろ城に
 其時光秀よりさうろ信長お軍家をさうろ城に
 よろ者いさうろ城にさうろ城に
 今より城の三好を助け天令に背きお軍の兵は對

一を引とるも既に安よせまり落城且夕の同より我
 足下の勇猛を感じてあるさうろ城のさうろ城に
 令九と後馬を討て汝を助けさうろ城を守りて
 のお令を誰んど難城の籠城とるさうろ城のさうろ城
 ありさうろ城のさうろ城にさうろ城に
 およりさうろ城のさうろ城にさうろ城に
 ひて城をさうろ城にさうろ城に
 とまらさうろ城のさうろ城にさうろ城に
 城をさうろ城のさうろ城にさうろ城に
 分明とさうろ城のさうろ城にさうろ城に
 守より先を悔と光秀が弁説と感とさうろ城に



明智秀満
勝政を説く

甲を脱く海系一々に先秀大に懐ひて篠後守と傳
ひ芥川の中隈より合討の次で篠後守が海系を云ふ
及びこれに信長卿なく先秀が功と稱し給ひ篠後守海
系神妙のよう御河を上げ揚子江に安堵と云ふは
御下知あるに篠後守深く信長卿の天恩を感し恩
を謝し退きたり

松永彈正降参

池田の城より池田篠後守勝政が軍家の御方は参りけしは
是を度く河原より時々の城より畠山次郎重春若江の城より三
好元系が義次さんと云ふは系より一河と傳と云ふ
なり依るに軍家御参りし幕政悉くお安堵と云ふなり

客は松永彈正久秀の先は三好と傳は軍義輝と云ふ
やうに三好一家と云ふは合戦度くわうなるが和久門
の城より楠籠り近國は威を震ひ丹波・美作と地を争ふ
殺参り及ぶは平角の戦ひと云ふは合戦なりは
此時松永信長卿と云ふは合戦にて信長の御方に参
難儀なるが三好家と云ふは和久門より義輝と云ふは
悉く三好家と云ふは合戦にて信長の御方に参
るるが信長は松永が旧恩を懐き今又彼が退後せるが
終へし其罪を赦し給ふ時に三好の一黨悉くと云
て海系より者なりと云ふを斗り給て休むの事と云
て對面あり是も不從安堵と云ふは合戦なりは

永も信長が心よへんとさまじく心を尽しつるは其の意も
松永と曰く不承と信長と不承とていふ事と付て候は
と云も何とく京都と京上と一將軍家に過し信長と
對面し懇款退位の嘉儀を授け信長の下知も許さる
かくれど諸國の大名小名我もくと御願も許さる
あれ信長卿の威勢教日の登るおとく京上同を加ふ所

義昭云將軍宣下信長卿任官

去程は小田と総々信長卿威名遠近に震いを國を
及向ふ敵一人もあらずに其川の隙を拂ひ義昭云を守
護して入洛しつて故細川氏經が宅地を造営して義
昭云の仮所と爲し其方の東に清水寺と云の隙を居ら

と永禄十一年冬の始めに延々京上と一義昭云に征伐を
軍と任ぜられ給ひ信長卿は後又任下彈心忠と補せ
洛中洛外の政事を授け京中の所人百姓並に信長卿
を鬼神のごとく恐れしき大おとく及ふに未だ其の意
をいさむる族もありたり爰は小田の足將は鶴見屋又即こ
つ者あり其の長七尺と余り形は整くはして背をくさ
悪くさるる二王のけつとて悪相限りなき者なり
信長卿の威勢は洛中お印の御威を乞ひ長き刀と横
へ京中をうめいき歩ゆは信長卿の相下と恐れ給遠
く京上を縮めたりと云ふ所面白きものなり

義昭公將軍
宣下信長卿
任官



鶴見及郎
洛中狼藉





西修寺園寺
左施人



よもよりかゝ軍々のいかに政のいかに智源さま
下をいかに後者即をいかに京都守護のいかにとほしめて
もお軍補佐のおいかに一重は年十月廿二日大軍系
部をいかに拂い出度後阜へ攻め一移ふ此時お軍義
昭公信長が忠勅をいかに修び給ひ自筆の感状并に二つ
柄の御旗をいかに賜ひたれば信長家の面見と秘藏に給ひる

西後等龍養本國寺

叔もお軍の仮御所要害堅固たるべしと後者よりい
て六条本國寺に移り住せ給ふ時永禄十二年正月
二日に國へ退教の三好が一族岩成を脱之助三好山城守
等お軍を龍養いなりんと其勢二万余騎本國寺へ押

あつりてより先後者即云用ありていかにいかに
せざれば京都の強勅大なるべしと又お軍をいかに
あつせよと上洛して西後をいかに防ぐべきと御下知あは
後者即お軍家の旧臣細川右馬院へお軍をいかに言上る
い三好が忠勅一カ騎龍養来るべしと又お軍心をいかに
及ぶに恐るべし信長のいかにお軍をいかに内裏お軍補佐の役
目たる本下後者即いかにいかに何条のいかにき某が本
陳留をいかに代りてお軍をいかにあつる竹中本をいかに清
西後の防衛に付られ下さば明日申の刻に某京に着
仕にせしと云ふりたる後者いかにいかにお軍をいかに始め
の諸士も皆く安堵のいかにいかに急ぎ竹中本をいかに清

本國寺合戦



[illegible]

年^ん方^は震^るて迷^{まよ}ひ^ひ智^ち意^い深^{ふか}き岩^い成^{なり}殆^{ほと}どそ^の腹^{はら}一^{いつ}旦^{たん}
お軍^{ぐん}遷^{せん}座^ざ一^{いつ}移^{うつ}る^るて討^{うち}た^たく^く容^{よう}易^いなる^るべしと
攻^せめを引^ひ退^{たい}陳^{ちん}をな^なて拒^いけ^くる^る依^よる^る寺^{てら}中^{ちゅう}の軍^{ぐん}兵^{へい}督^{とく}計^{けい}心^{しん}
保^{たも}ん^ん下^げ竹^{たけ}中^{ちゅう}が才^{さい}智^ち深^{ふか}感^{かん}ト何^{なん}なり

本國寺合戦

爰^{こゝ}に若^わしの城^{しろ}を三^{さん}好^{こう}元^{げん}系^{けい}を主^{しゅ}義^ぎ決^{けつ}ひ故^こ三^{さん}好^{こう}長^{ちやう}慶^{けい}が
とて松^{まつ}永^{えい}及^{およ}び三^{さん}老^{らう}后^{こう}の吹^ふ捧^{ほう}より出^いで^で若^わし者^{もの}た^たれ共^{ども}
若^わお軍^{ぐん}義^ぎ輝^きをを弑^{ころ}せし^し松^{まつ}永^{えい}等^らが衣^え表^{ひょう}ありて己^{おのれ}が
不^ふ約^{やく}なり^{なり}は由^{よし}お軍^{ぐん}義^ぎ昭^{しょう}云^いの所^{ところ}方^{かた}より集^あり供^{とも}に三^{さん}好^{こう}
を誅^{ころ}せし^し若^わお軍^{ぐん}の思^{おも}ひ厚^{あつ}く若^わしの城^{しろ}を安^{あん}堵^とし^し今^{いま}
度^{たび}三^{さん}好^{こう}の三^{さん}老^{らう}后^{こう}等^らお軍^{ぐん}を籠^{かご}めたる^るよう^{よう}はと等^らし^しを

軍^{ぐん}勢^{せい}を率^{りつ}し^しお軍^{ぐん}家^け後^ご浩^{こう}のお瓶^{びん}川^{がわ}を陳^{ちん}をな^な修^{しゆ}丹^{たん}池^ち
田^での兵^{へい}を待^{まち}居^ゐる^る凶^{きよう}徒^とをを先^{せん}後^ご浩^{こう}の勢^{せい}を討^{うち}散^{さん}
せよとて岩^い成^{なり}主^{しゅ}統^{とう}之^の助^{すけ}本^{ほん}國^{こく}寺^{てら}を三^{さん}好^{こう}下^げ野^や守^{しゅ}同^{どう}山^{さん}城^{じやう}を
攻^せめ自^{みづか}ら余^よ勢^{せい}を率^{りつ}し^し瓶^{びん}川^{がわ}へと急^{いそ}ぐ^ぐ去^さは^は三^{さん}好^{こう}
勢^{せい}の寺^{てら}僧^{そう}等^らを欺^{あや}し^しお軍^{ぐん}の沖^{おほ}遷^{せん}座^ざを令^{しやう}や^やくと待^{まち}
たれと寺^{てら}中^{ちゅう}一^{いつ}統^{とう}靜^{じやう}なり^{なり}て音^{おと}もせど又^{また}日^ひも西^{にし}に傾^{かた}け
を三^{さん}好^{こう}山^{さん}城^{じやう}守^{しゅ}大^{だい}き^きに怒^{いか}り^りて奏^{そう}する^る小^{せう}寺^{てら}中^{ちゅう}の
軍^{ぐん}勢^{せい}より用^{もち}意^いを^をり^りたり鉄^{てつ}炮^{ぱう}交^{かう}る^る雨^{あめ}は^はお^おに放^{はな}ち
うけひる^る心^{こころ}を胆^い村^{むら}中^{ちゅう}守^{しゅ}七^{しち}百^{ひやく}余^よ人^{にん}鋒^{ほう}先^{せん}を並^{なら}べ^べ切^きて
出^い勇^{ゆう}を震^{ふる}て戦^{いくさ}ふ^ふる^る兵^{へい}浪^{なみ}人^{にん}赤^{あか}煙^{えん}奥^{おく}村^{むら}等^ら六^{りく}人^{にん}の勇^{ゆう}
士^し胆^い村^{むら}に^に加^かり^り居^ゐる^る諸^{しよ}兵^{へい}接^{けつ}て突^つき^きぬ^ぬ一^{いつ}款^{くわん}を



西宮
後
河
又
支
七



捕て移ら着し台なる名とまぐさしども三好方大勢
 なれど智く戦ふとまは死傷の若殺をさるに時三
 好勢の後より五々の吹貴をとりとらびせ本下辰を先
 小六政勝稲田大炊大は主水堀尾茂助等又百余人と
 つと噴て突くといふ前後の敵三好が勢さんぐと敗退
 岩成とつとあらんと加茂川の流水は流のゆを引と
 逐よりり小六堀尾稲田が主水堀尾兵急と追討しおる首
 又百有余狐川まで追逃あり

凶徒等敗走狐川

去程又岩成主税の狐川にて三好義次と後り合ふ勢は
 火をとりして戦ひつるがえより岩成接解の勇者を

を士卒を励し無二無三と戦ふ程は義次が勢討るより
 殺をさるに既に敗山の体よりさるる川上の山落ゆ
 に五々の吹貴殺百流川凡と敵を殺す軍兵押寄来
 是に岩成が兵大さきと追き敵の軍勢味方の後をえ切
 を合戦頗難低なりとゆ人をかり殺るる一軍勢を
 とりとる二も又ゆ人をえと下知する者三好山城
 下野守が兵士さんぐとゆと逐来り岩成が勢の中へ人
 るがしは連て殺さるれば本下竹中村二階中が勢勝
 系て追来り家とゆい岩成が勢は弱きとゆい
 落ゆ程より二万余騎とまへりもに南に方へ敵は
 漸く退る者一万余人素龍寺の城へ入りより退る即

其の軍は是よりそと逆る敵を退捨し、因を搦ち、
寺とゆりたる彼又その要害を押立、寺兵より本
下下知を交け、小幡伏見の百姓は紙をひて旗吹を
作し、さきより少散て敵の心と棄つる者も、漆喰なり

信長再上洛

叔も今夏の隆勢、其よりさうりたるに、お軍が御味方武
士退く、本國寺へ集り、さしと敵より上洛きて、京都脱し、
静まりたるに、皆くお軍は福し、凶徒退散の後を、
しなりたるに、お軍も御寺を罷り、く、ゆるし、
御褒詞は、お軍も御寺を罷り、く、ゆるし、
大徳波阜より、誠年あり、二月、日京都より、飛れ、
三

三好の逆後、大軍をひて、本國寺を攻討り、急なり、
急に上洛して、平治めき、さうりたるに、信長其勢より、
あは波阜と、お立、お立、日、お立、官、お立、お立、
役節より、凶徒一旦、御所に押寄せ、討つるも、諸おの勇
戦より、悉く退散して、京都静謐なり、及ぶより、
信長大に安堵し、ゆるし、御田より、一日、人馬の足、
七日、京都より、本國寺より、お軍に、福し、合戦の勝利
を、お立、ゆるし、お軍にも、信長より、述の上洛、御褒詞、
と、お立、本下竹中が、お立、お立、ゆるし、
け、お立、信長、悉く、恩賞の、お立、お立、
ゆるし、寺院より、偶座より、ゆるし、お立、
三



二条家阿の地面を撰りつたは御軍の居城を造営と
なりて村井民部之丞等回不之助兩人を普請なり
と定り永祿十二年正月より永祿十三年を営むる

お信長惣焼泉別堰町人

去後三好が一族家門の敗軍を集りて美濃より企
くれば信長御大軍を率一上洛し給ひ京都の使を
固かりてはたし建も叶はじとていひ給ふやま龍寺の城を
引拂ひに國とていひたり信長御も三好が御黨退討に
と其の御を給ひ給ひたりとて又御勢遠く退き給へば
多て罪を問ふと其後又捨置給ひたり又城の御の
町人ども去年お軍家御上洛の初も御を應せし新

お軍家御敵討の事を露し此度又三好を援助し堰の御
と勢をせしむるなりとて御料許しに信長御も
傍り給ひ堰の澤一帯は火をうけ人馬驚きたるを焼く
なりとてお信長とて下洛者大に是を悔みなり今度
室町の御所造営中禁裏御後の入用金若井乃依
りて當時諸國にも兵乱多き困窮の時なり其相違
甚難儀の秋之堰の澤は福家の町人較多候にぬき罪を
寛いて今度の御所造営の用金と御付られ仁智を以て
両全の御斗ひこそなりましかるは諸の某は御世下は
宣しひもなきはとて信長御も今度の太閤宮の
りはあはれと通て心を苦め給ひ給ひたり又若井乃依

信長怒て水
 列の町人等
 を焼んとす



真蹟記初篇十一



